

## ザルツブルク聖霊降臨祭&チェコ9日間

### 旅と公演のレポート 水谷 彰良

6月3日に成田を発ち、プラハでオペラ2本、ザルツブルクでオペラ2本とコンサート三つ、加えてガラ・ディナーにも出席し、11日に帰国しました。9日間の旅、実質的に6日間の現地滞在で八つの催しですから盛り沢山。ザルツブルクでは後述するように歌手のドタキャンや予告と異なるガラ・ディナーといった問題もありましたが、上演と演奏はどれも素晴らしく大満足でした。以下、帰国早々の時差ぼけのなか、簡潔に旅の感想を書かせていただきます。

#### ◎プラハで観た《売られた花嫁》と《コジ・ファン・トゥッテ》

最初の3日間はプラハでの観劇とチェスキー・クロムロフ観光&宿泊。6月4日にプラハの国民劇場で観たのはスメタナ《売られた花嫁》です。由緒ある劇場でチェコ語の上演を観るのが目的で、とくに演奏に期待していませんでしたがそこは本場、冒頭から合唱が上手で迫力があり、驚きました。ダヴィド・シュヴェク指揮のオーケストラも快調なテンポで演奏し、マジエンカ役パヴラ・ヴィコパロヴァをはじめとする歌手たちも及第点の歌唱で楽しめました。マグダレーナ・シュヴェコヴァによる演出は低予算のアイディア勝負で、巨大なベニヤ板を背景や装置に用い、サーカス団のシーンでは等身大の人形を宙吊りにしてアクロバティックな見せ方をしていました。

翌5日は《ドン・ジョヴァンニ》が初演されたスタヴォフスケ劇場にて、《コジ・ファン・トゥッテ》を観劇しました。小さいながらも美しい劇場で、モーツァルトがここで指揮したかと思うと感慨ひとしおです。こちらも歌手は超一流とは言えませんが女性3役が健闘し、中でもデスビーナを歌った沖縄出身プラハ在住の金城由紀さんが歌と演技で際立っていました。マルティン・チチュヴァクの演出は、中をくり抜いた円形の舞台を使用するだけでとくに褒めるところも感心するところありません。オーケストラは弦の合奏精度が高くありませんが、レチタティーヴォ・セッコの伴奏にフォルテピアノを用い、指揮者ロベルト・ジンドラが優秀でした。楽曲とレチタティーヴォのカットが結構多いのですが、時差ぼけの身には上演時間が短くなって嬉しかったです(笑)。

6日は世界遺産のテルチを訪ね、チェスキー・クロムロフに宿泊しました。チェスキー・クロムロフはバロックの城内劇場でも知られ、先日NHK-BSで放送された《オルフェオとエウリディーチェ》のロケ地でしたからご存じの方も多はず。筆者は今回初めて訪れましたが、実はもっと驚いたのが前日訪問したスメタナ生誕の地リトミシュルの城内劇場でした。こちらはチェスキー・クロムロフよりも遥かに小さな劇場で、召使や消防係の座るベンチ、エリート学生のための末席など舞台以外の作りにも感心しました。この二つが18世紀のオリジナルの機構と書割が現存するチェコ共和国唯一の劇場で、どちらもチェコ人ガイドの解説



《売られた花嫁》のカーテンコール(筆者撮影)



スタヴォフスケ劇場(筆者撮影)



リトミシュルの城内劇場の建物(筆者撮影)

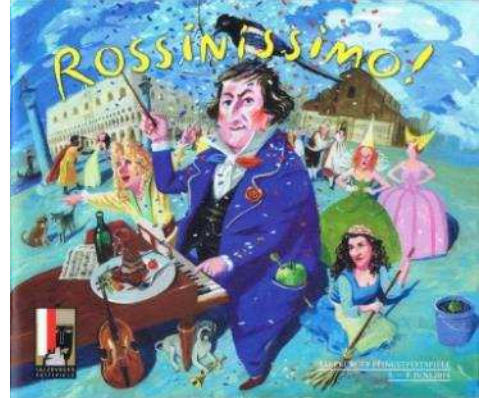
付きで堪能しました。リトミシュル城内劇場の詳細は、こちらの動画をご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=qdFSsGY0NCs>

7日にザルツブルク入りし、いよいよ聖霊降臨祭音楽祭。フェスティバルそのものは5日の《ラ・チェネレントラ》初日に始まり、6日はカウンターテナー、フランコ・ファジョーリのリサイタル、マリオネット劇場での《セビーリヤの理髪師》もありましたが、筆者は7日《ラ・チェネレントラ》2日目（最終日）からの観劇です。

### ◎《ラ・チェネレントラ》(モーツァルト劇場)

序曲が始まると舞台を隠している幕にマンガ的な映像が映り、半ズボンをついた天使らしき人物が下りてくる。幕が上がって舞台に安食堂が現れ、エプロン姿のバルトリ=チェネレントラが床を掃き、父とおぼしき店の主人がレジでうたた寝しています。そこにやってきた姉妹がレジからお金を盗んで立ち去ると、目覚めた父がレジのお金が減っているのに気づき、チェネレントラを引っぱたく……そんな黙劇が序曲の間に進行します。演出家ミキエレットは時を現代に移し、チェネレントラの境遇を的確に視覚化します。とはいえ彼女を王子様の屋敷に導く非現実的な出来事が物語に含まれ、その辺の問題はアリドーロを天使の化身にして解決しています。メキシコ人テノール、カマレナの演じるドン・ラミーロも風采の上がらぬオッサン風で、黄色のゴム手袋をした掃除婦（チェネレントラ）と出会います。ラミーロの宮殿広間への舞台転換も安食堂の装置を上方に持ち上げてなされますが、舞台の様子を詳しく書くと切りがありませんので、詳しくは聖霊降臨祭音楽祭のサイトをご覧ください（すべての演目の写真が見られます <http://www.salzburgerfestspiele.at/fotoservice/subcategoryid/4539/archivyear/2014>）。



ドラマの締め括りも才気に富んでいます。ロンド・フィナーレでは、王子の妃になったチェネレントラが王子を除く全員に小箱を手渡します。素敵な贈り物かと思いきや、中には黄色のゴム手袋。天井からバケツと雑巾が下りてきて、ゴム手袋をはめた全員が這いつくばって床を拭き掃除をするなかチェネレントラと王子が手を取り合って愛の勝利にひたる、という皮肉な幕切れです。

ミキエレット演出の舞台が事前の想像以上に計算しつくされていて面白く、歌手も全員素晴らしい歌唱を繰り上げます。席も3列目とあって舞台が良く見えました。中でも驚いたのがカマレナの卓越した技巧で、第2幕のアリアの圧倒的歌唱、見事なハイCとハイDが観客を熱狂させました。筆者はカマレナ初体験でしたが、ティンブロン（声質）と技巧の双方でフローレスに匹敵……否、すでにフローレスを超えているのでは……と思いました。バルトリの素晴らしさは、あらためて言うまでもないでしょう。カーテンコールで指揮者スピノジにブーが飛びましたが、アンサンブル・マテウスの演奏については《オテッロ》で述べたいと思います。



《ラ・チェネレントラ》のカーテンコール(筆者撮影)

### ◎パッパノー指揮の演奏会(祝祭大劇場:《リベラ・メ》《スタバト・マーテル》)

翌8日は三つの演奏会とガラ・ディナーに出席する怒涛の一日。最初は正午開始、パッパノー指揮ローマ・サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団&合唱団による演奏会です。曲目はヴェルディ《リベラ・メ》とロッシーニ《スタバト・マーテル》。当初予定のソリストはクラッシミラ・ストヤノヴァ、エリーナ・ガランチャ、ピョートル・ベチャワ、アーウィン・シュロットですが、最初の3人がキャンセルし、マリア・アグレスタ、ソニア・ガナッシ、ローレンス・ブラウンリーに替わりました。ガナッシは一週間前ローマ歌劇場の《ナブッコ》で見たばかり。ガランチャとベチャワで聴きたかったのですが、仕方ありません。

席は3列目の右端ですが、半円状の舞台前面ぎりぎりまで弦楽器席があり、ソリストがほとんど見えません。通常のおけの並べ方ならなんの問題も無いのに……と残念でしたが、演奏そのものは大変見事でした。ヴェルディが《ロッシーニのためのレクイエム》のために作曲した《リベラ・メ》を聴けたのも大収穫で、ソリストのアグレスタと合唱団による渾身の演奏に感銘を受けました。



## ◎ロッシーニ《小ミサ・ソレムニス》(モーツァルテウム大ホール)

午後5時から、モーツァルテウム大ホールにて《小ミサ・ソレムニス》を鑑賞。2台ピアノとハルモニウム伴奏によるオリジナル版で、パッパーノがピアノを弾きながら指揮しました。ソリストは予定どおりエヴァ・メイ、カサロヴァ、ブラウンリー、ペルトウージの4人。合唱は、サンタ・チェチーリア国立アカデミー合唱団の選抜22名でした。

大ホールと言っても実際は小さなホール。パッパーノの第一ピアノを中央に置き、ソリスト4人がその左に並びます。筆者の席は2列目の左側とあって歌手と眼と鼻の先のベストポジション。ソリストはカサロヴァとペルトウージの歌唱が絶品。メイはやや冷たい表情で、ブラウンリーの声は筆者の好みではありませんが、合唱の巧さも相まって名演と呼ぶにふさわしい演奏となりました。

現在は管弦楽伴奏版の演奏が多く、2台ピアノとハルモニウム伴奏のオリジナル編成で聴く機会はむしろ少なくなっています。筆者はペーザロのロッシーニ劇場で1997年にフローレス他、2004年にバルチェローナとシラグーザ他で聴きましたが、完成度は今回が勝ります(ペーザロの演奏はプラハ室内合唱団がイマイチ)。それゆえ筆者にとって、生涯最高の《小ミサ・ソレムニス》となりました。



《小ミサ・ソレムニス》のカーテンコール(筆者撮影)

## ◎大ロッシーニ・ガラ(祝祭大劇場)

《小ミサ・ソレムニス》の次は午後8時から祝祭大劇場の「大ロッシーニ・ガラ」。昨年の発表では15人の歌手がラインナップされ、その後フローレスの出演が決まって16人になりましたが、今年5月末の段階でアグネス・バルツァ、レオ・ヌッチ、イルデブランド・ダルカンジェロの名前が消え、マッシモ・カヴァッレッティが入って14人になり、6月1日にはモンセラ・カバリエとモンセラ・マルティが抜けて12人に……と二転三転。

「カバリエは御年81歳のご老体ですから、無理は言えませんね」とメルマガ第65号に書き、それで終わりと思ったらすに。なんと本番にテレサ・ベルガンサとアーウィン・シュロットが現れず、次の10人になってしまいました。

メゾソプラノ：チェチーリア・バルトリ、ヴェッセリーナ・カサロヴァ  
テノール：ホセ・カレーラス、フアン・ディエゴ・フローレス、ハビエル・カマレナ  
バリトンとバス：アレッサンドロ・コルベリ、カルロス・ショーソン、マッシモ・カヴァッレッティ、  
ミケーレ・ペルトウージ、ルッジェーロ・ライモンディ

ベルガンサとシュロットがドタキャンであることは、プログラムに名前とプロフィール、曲目に彼らの歌う「今の歌声」とモゼのアリアが載っていることでも判ります。これでは具合が悪いとあって、バルトリがピアノ伴奏でロッシーニの歌曲「踊り」を披露しました。ちなみに筆者が事前に想像した《ランスへの旅》十四声の大コンチェルトは曲目に無く、実際に演奏されたのは次の14曲でした。

### 【第一部】

- 1 《ギョーム・テル》序曲
- 2 《セビーリヤの理髪師》～フィガロのカヴァティーナ(カヴァッレッティ)
- 3 《セビーリヤの理髪師》～バジールオのアリア(ライモンディ)
- 4 《ラ・チェネレントラ》～ドン・マニーフィコのアリア(ショーソン)
- 5 《ラ・チェネレントラ》～レチタティーヴォ、ドン・ラミーロとチェネレントラの二重唱(フローレス&バルトリ)
- 6 《泥棒かささぎ》～代官のアリア(ペルトウージ)
- 7 《セビーリヤの理髪師》～第1幕フィナーレのストレッタ(バルトリ、フローレスほか)

### 【第二部】

- 8 《セミラーミデ》序曲
- 9 《セミラーミデ》～アルサーチェのレチタティーヴォとアリア(カサロヴァ)

- 10 歌曲「踊り」(バルトリ)
- 11 《ラ・チェネレントラ》～ドン・ラミーロのアリア (カマレナ)
- 12 《イタリアのトルコ人》～ドン・ジェローニオとフィオリツラの二重唱 (コルベリ&バルトリ)
- 13 《試金石》～ジョコンドのレチタティーヴォとカヴァティーナ (カレーラス)
- 14 アンコール：《セビーリヤの理髪師》第1幕フィナーレ末尾 (カレーラスを除く全員)

ドタキャンへのエクスキューズもあってか、ザルツブルク音楽祭総裁アレクサンダー・ペレイラが登場して司会進行を務めました。序曲はモーツァルテウム管弦楽団が活気あふれる演奏をし、指揮者アーダム・フィッシャーがゼツダ先生のように見えました。歌手は、間違にフィガロのカヴァティーナを歌ったカヴァッレッティに続いて登場したライモンディがテンポを勝手に変えてやりたい放題で大爆笑。ショーソンは二つの椅子を小道具にしてドン・マニーフィコのアリアを歌い、その巧さに舌を巻きました。《ラ・チェネレントラ》の二重唱も「舞台でのフローレスとバルトリ初共演」とのサプライズで大盛り上がり。バルトリは前日の公演の黄色いゴム手袋をしたお掃除オバサン姿で登場しました。

第二部はドン・ラミーロのアリアを歌ったカマレナが圧倒的歌唱で、大喝采に応じて即座にカバレッタをアンコール。その人気はフローレスを凌ぎ、ザルツブルクでのスター誕生に立ち会った気がします。筆者もすっかりカマレナのファンになりました。大トリに登場したカレーラスはかつて《オテッロ》を全曲録音したとはいえ、いわゆるロッシェニ歌手ではなく、ここでも《試金石》のレチタティーヴォと叙情的なカヴァティーナを歌っただけですが、その真摯な表現が感動を誘いました。

アンコールで歌われた《セビーリヤの理髪師》第1幕フィナーレの末尾は全員ノリノリ。実に楽しい演唱でしたが、カレーラスは参加せず、オケのヴァイオリンの末席に身を隠すように佇んで観ていたのが印象的でした……その表情は少し寂しげで、「自分はこの場にいるべきでない」と感じているかのようでした（筆者の席は4列目の左端なので、カレーラスの表情が手に取るように見えました）。ともあれ「大ロッシェニ・ガラ」の名にふさわしい、超豪華にして最高のパフォーマンスとあって、これまた大満足でした。



寂しげなカレーラスを迎えに行くバルトリ（筆者撮影）

### ◎「看板に偽りあり」のロッシェニ風ガラ・ディナー (カール・ベーム・ザール)

この日四つ目の催しが、大ロッシェニ・ガラに続いて開催された「ロッシェニ風ガラ・ディナー」。スペイン三ツ星レストランの女性シェフ、エレナ・アルザックとそのスタッフによる晩餐会です。実はこれが大誤算。総合プログラムに「トゥルヌド・ロッシェニが供される」との説明があるのに、当日のメニューにはトゥルヌド・ロッシェニどころかロッシェニ風料理すらありません。そもそも料理界における「ロッシェニ風 a la Rossini」は、「(ロッシェニが好んで用いた) トリュフとフォアグラの付け合せ」が常識ですから、料理にそのコンセプトがなければロッシェニ風ガラ・ディナーとは言えません。なのにロッシェニ風料理が一つの無く、メインディッシュが「スズキ」と、「ハト料理」になっているのです。

前日それを知り、ある人を通じて「総合プログラムに載っている催しの概要と違いすぎる」「トリュフとフォアグラ無しにロッシェニ風と称することはできない」とフェスティバル側にクレームを入れましたが、「シェフの決めたこと」と取り合ってもらえなかったそうです。

筆者は「詐欺!」「ロッシェニに対する冒涇!」と怒りましたが、大ロッシェニ・ガラが長引いて夜11時くらいからロビーでシャンパン飲みながら次々にやって来る歌手を見ていたら、どうでも良くなってしまいました（シャンパン4杯目で頭クラクラ）。着席して前菜を供されたのが午前零時（以下、時間は大雑把な記憶に基づきます）、午前1時にスズキ、2時にハトを食べながら「ミラベル庭園の鳩が減った原因がこれ!」と口走って響感をかい、食後酒を飲んでタクシーでホテルに戻ったのは午前2時半をゆうに回り、そのままベッドに倒れ込みました。



ロッシェニ風でないハト料理と、宴会後のバルトリとシェフ（筆者撮影）

◎絶品のロッシーニ《オテッロ》(祝祭大劇場)

二日酔いで迎えた最終日(9日)は、午前11時開始のジョイス・ディドナートの歌曲リサイタル(モーツァルトム)をパスし、午後4時開始の《オテッロ》に備えました。

基本的にDVDになっている2012年3月チューリヒ歌劇場の上演と同じプロダクションですが、ソリストはロドリゴ役のカマレナがエドガルド・ロチャ、イアーゴ役のエドガルド・ロチャがバリー・バンクス、ムハイ・タン指揮チューリヒ歌劇場ラ・シンティッラ&合唱団がスピノジ指揮アンサンブル・マテウス&シャンゼリゼ劇場合唱団に変わっています。この日のロチャはDVDのカマレナ以上の出来で、合唱の違いも影響なし。問題はアンサンブル・マテウスが迫力とインパクトに欠ける点で、弦のセクションも弱々しく感じられます。《ラ・チェネレントラ》でスピノジにブーが出たのもその辺に原因があるようで、ここ数年ロッシーニを伴奏しても喜歌劇ばかりとあって力不足。《オテッロ》ではホルン独奏がコケ、ヴァイオリン奏者の飛び出しもありました。

とはいえ、歌手は3人のテノール——オテッロのジョン・オズボーン、ロドリゴのロチャ、イアーゴのバンクス——が絶好調でハイCとハイDを連発、デズデーモナのバルトリも歌と演技に最高のパフォーマンスを繰り広げ、フェスティバルの締め括りにふさわしい公演となりました。

モーシュ・ライザー&パトリス・コリエによる演出は20世紀後半に時を移し、柳の歌ではデズデーモナがレコードをかけ、前奏の途中から実際の演奏になります。これに先立つシーンでは、デズデーモナがゴンドラ漕ぎの歌詞「みじめな境遇にあって、幸せの時を想いおこすより悲しきは無し」を壁に書き写して悲劇性を高め、フィナーレのオテッロとデズデーモナの口論と刺殺も写実的かつ迫力満点に描かれます。個人的には刺殺後の描き方に不満もありますが、シェイクスピアやヴェルディを想起させずにロッシーニ作品の神髄を今日的解釈で提示した演出を高く評価したいと思います。ツアーの女性のお客様が「柳の歌からずっと涙が止まりません」と言って終演後も涙を拭い、他のお客様も「ヴェルディの《オテッロ》より素晴らしい。感動しました」と話していました。5列目の席で観劇した筆者も、DVD以上の感銘を受けました。フェスティバル最終日、1回だけの《オテッロ》とあって歌手たちの集中力もことのほか高く、文字どおり最上級の“ロッシーニシモ”となりました。



《オテッロ》の舞台

© Salzburger Festspiele / Silvia Lelli

かくして《ラ・チェネレントラ》に始まり、《スタバト・マーテル》、《小ミサ・ソレムニス》、「大ロッシーニ・ガラ」、「ロッシーニ風ガラ・ディナー」、《オテッロ》と続く怒涛の3日間が終わりました。期待外れのガラ・ディナーを除いてオペラとコンサートはどれも最高水準、間違いなくロッシーニ演奏史に残るものばかりでした。その豪華さでペーザロのフェスティバルを超えたのも、ひとえに芸術監督バルトリのおかげと言えます。ザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭で毎年ロッシーニをやればいいのに、と本気で思いましたが、1回だからこそ可能な奇跡なのかもしれません。でもその奇跡に立ち会えた人は、本当に幸せです。

付記：本稿は日本ロッシーニ協会メールマガジン「ガゼッタ」第66号(6月15日配信)と第66号のつづき(6月19日配信)から一部表記を変更し、図版を加えて『ロッシーニアーナ』第35号に転載した文章の書式変更版です。

(水谷彰良)



祝祭大劇場に掲げられた巨大ポスター(筆者撮影)